第13回. クラメルの公式と特殊な行列式 (三宅先生の本, 3.4, 3.5 の内容)

岩井雅崇 2022/07/14

この授業で行う内容は理解しなくても構いません (結構マニアックな話題を扱います). また覚える必要もございません.

1 クラメルの公式

定理 1. A を正則な n 次正方行列とし、列ベクトル a_1,\ldots,a_n を用いて $A=\begin{pmatrix}a_1&\cdots&a_n\end{pmatrix}$ と表されているとする.このとき連立 1 次方程式 Ax=b の解は次のようになる.

$$x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, x_i = \frac{\det \begin{pmatrix} a_1 & \cdots & b & \cdots & a_n \end{pmatrix}}{\det A}.$$

例 2.
$$A = \begin{pmatrix} 5 & 1 \\ 3 & 2 \end{pmatrix}$$
, $\boldsymbol{b} = \begin{pmatrix} 3 \\ 2 \end{pmatrix}$ とする. 連立 1 次方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ の解を $\boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$ とすると,

$$x_1 = rac{\det\left(m{b} \quad a_2
ight)}{\det A} = rac{igg| 3 \quad 1}{2 \quad 2} {5 \quad 1} {3 \quad 2} = rac{4}{7}, \ x_2 = rac{\det\left(a_1 \quad m{b}
ight)}{\det A} = rac{igg| 5 \quad 3}{3 \quad 2} {1 \over 5 \quad 1} = rac{1}{7}$$
 రహన్.

2 特殊な行列式

定理 **3.** 1. (ヴァンデルモンドの行列式)

$$\begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & 1 \\ x_1 & x_2 & \cdots & x_n \\ x_1^2 & x_2^2 & \cdots & x_n^2 \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ x_1^{n-1} & x_2^{n-1} & \cdots & x_n^{n-1} \end{vmatrix} = \prod_{1 \le i < j \le n} (x_j - x_i).$$

2. (ヴァンデルモンドの行列式の応用) $b_1,\ldots,b_n,c_1,\ldots,c_n$ を実数とし, b_1,\ldots,b_n は相 異なると仮定する. このとき実数係数の n 次式 $f(x)=x^n+a_1x^{n-1}+\cdots+a_{n-1}x+a_n$ があって, 任意の $i=1,\ldots,n$ について $f(b_i)=c_i$ となる.

 $\prod_{1 \le i < j \le n}$ は積の記号で、 $\prod_{1 \le i < j \le n} (x_j - x_i)$ は「 $1 \le i < j \le n$ を満たす (i,j) について $(x_j - x_i)$ を全てかけた数」を表している.

定理 4.

$$\begin{vmatrix} a_0 & -1 & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ a_1 & x & -1 & 0 & \cdots & 0 \\ a_2 & 0 & x & -1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & & \ddots & \ddots & 0 \\ a_{n-1} & 0 & 0 & & x & -1 \\ a_n & 0 & 0 & 0 & \cdots & x \end{vmatrix} = a_0 x^n + a_1 x^{n-1} + \dots + a_{n-1} x + a_n.$$

3 終結式と判別式

以下の内容は「永田雅宜著 理系のための線型代数の基礎 (紀伊國屋書店)」の第3章に基づく.

定義 5. a_0, a_1, \ldots, a_n を複素数とし, $f(x) = a_0 x^n + a_1 x^{n-1} + \cdots + a_{n-1} x + a_n$ とする (ただし $a_0 \neq 0$ とする). f(x) = 0 の解を $\alpha_1, \ldots, \alpha_n$ とするとき,

$$D=a_0^{2n-2}\prod_{1\leq i < j \leq n}(lpha_j-lpha_i)^2$$
 を $\underline{f(x)}$ の判別式という.

簡単にわかることとして、「 $D \neq 0 \Leftrightarrow f(x) = 0$ の解が相異なる」である.

例 6. $f(x)=a_0x^2+a_1x+a_2$ の判別式 D を求める (ただし $a_0\neq 0$ とする). α_1,α_2 を f(x)=0 の解とすると, 解と係数の関係から

$$a_0x^2 + a_1x + a_2 = a_0(x - \alpha_1)(x - \alpha_2)$$

であるので、 $-a_1 = a_0(\alpha_1 + \alpha_2), a_2 = a_0\alpha_1\alpha_2$ となる. よって

$$D = a_0^2(\alpha_2 - \alpha_1)^2 = a_0^2\{(\alpha_1 + \alpha_2)^2 - 4\alpha_1\alpha_2\} = a_1^2 - 4a_0a_2.$$

定義 7. 複素係数多項式 $f(x)=a_0x^n+a_1x^{n-1}+\cdots+a_{n-1}x+a_n,\ g(x)=b_0x^m+b_1x^{m-1}+\cdots+b_{m-1}x+b_m$ (ただし $a_0\neq 0,b_0\neq 0$) について, m+n 次正方行列を次で定める.

$$\begin{pmatrix}
a_0 & a_1 & \cdots & a_n & 0 & 0 & \cdots & 0 \\
0 & a_0 & a_1 & \cdots & a_n & 0 & \cdots & 0 \\
0 & 0 & a_0 & a_1 & \cdots & a_n & \cdots & 0 \\
\vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\
0 & 0 & \cdots & 0 & a_0 & a_1 & \cdots & a_n \\
b_0 & b_1 & b_2 & \cdots & \cdots & b_m & \cdots & 0 \\
\vdots & \ddots & \ddots & \ddots & & \ddots & \vdots \\
0 & \cdots & b_0 & b_1 & b_2 & \cdots & \cdots & b_m
\end{pmatrix}$$

この行列の行列式をf,g の終結式と言い, R(f,g) と表す.

定理 8. 1. f(x)=0 の解を α_1,\ldots,α_n とし, g(x)=0 の解を β_1,\ldots,β_m とすると

$$R(f,g)=a_0^mb_0^n\prod_{1\leq i\leq n, 1\leq j\leq m}(lpha_i-eta_j)=a_0^m\prod_{1\leq i\leq n}g(lpha_i)$$
 ావర్.

特に R(f,g)=0 は f(x)=g(x)=0 が共通解を持つことと同値である.

2. f' を f の微分とすると,

$$R(f, f') = (-1)^{\frac{n(n-1)}{2}} a_0 D.$$

特に f(x) の判別式 D は a_0,\ldots,a_n の式でかける. また R(f,f')=0 は f(x)=0 が重根を持つことと同値である.